

# 森林につれていく前に 知っておいて ほしいこと



## ～引率者のための心構え～

今まで子どもを森林に連れて行った事なんてないし、子どもをどうやって遊ばせたらよいか分からないし、自分もどうやって子どもと遊んだらよいか分からないし、森林は危険がいっぱいだろうし。そんな心配が消えないのが、森林へ子どもを連れて行く時の悩みですね。ここでは私たちが気をつけなければならない心構えを紹介します。



**Q** 自然のことを何も知らないの、子どもを森林に連れて行っても遊ばせられません。

**A** 大人は「場」を作つてあけること。それだけです。

心配はいりません。なぜなら、子どもは森林遊びの天才だからです。森林に入ったとたん彼らは本当にいろんなことに気づき工夫して遊びます。そして、はじめから森林や自然がきらいな子どもは見つかることがありません。ですので、まず彼らを身近な森林に連れて行き、何をするのか、見守る・こちらが遊び方を教えてもらうぐらいの気持ちで十分だと思えます。人間の好奇心は本能とも呼べるような深いところにあります。だから、きつかけさえあれば、森林での遊びや探検はどんどん広がっていきます。大人がすべきは、彼が主体的にその能力(センス)を伸ばすことができる「ワンダーランド」を用意すること。つまりそれが森林なのです。

**Q** うちの子どもは森林に行っても遊びや探検が広がっていかなくつたので好奇心が足りないのでは？

**A** 大人ががまんして子どもを「待つて」あけることが大切です。

それはきつと「待つ」時間が短いのもかもしれません。幼児期の子どもは本能的といつてもいいほど、自分のセンスを伸ばそうとします。それを邪魔しているのは実は大人だったりします。邪魔とは、子どもが主体的に何かをする前に大人が何か「与える」もしくは「ストップ」をかけることです。これでは子どもたちの熱意は冷めてしまい、やる気、ひいては子どもの活動の原動力となる好奇心を伸ばすことができせん。つまり大人がすべきことは「熱意」を呼び起こす「促進」なのです。その一つとして大切なことは、待つてあけることです。



**Q** 森林の中で、子ども達とどのように接すればよいのか教えてください。

**A** 子ども達の感動に寄り添って共感するのです。

彼らが主体的にもっと遊びたい、もっと何かを見つけないかと思わせるために重要なのが共感する心です。

彼らの驚きや感動と一緒に「って笑い、喜ぶといった「共感する態度」や、見つけたことを「ほめる姿勢」は、子どもが次の活動を展開しようとする気持ちを支えます。そしてその遊びを発展・リードしていく力が、指導者には必要です。



**Q** 「森林でもっと遊びたい」という子どもに、どんな促し方をすれば良いですか？

**A** その子の好みに合わせてやる気を喚起してあげてください。

子どもたちの発見を質・量ともに増やすために人間が持ちうるセンサー（感覚）や空想力、想像力を研ぎ澄ませるように仕向けることが求められます。そのときになって初めて指導者にも森林や自然への造詣や態度が試されます。でも、心配いりません。そのときが来たら一緒に学べばいいのです。子どもの気づきをきっかけに指導者も一緒に成長することが大切です。もちろんほかの人（外部の講師）や、ほかの人のメッセージ（本書では絵本）の力をかりてもいいでしょう。



**Q** 森林での遊びを続ける上で考えておかなければいけないことはありますか？

**A** つながり、発展してゆくそんな流れを意識しましょう。

「絵本」を読んだり、「声かけ」をして子どもがもつ「好奇心を刺激し、感覚を研ぎ澄ませ、空想力や想像力を膨らませ」、「何かを体験（感覚を使ったり、発見したり、運動したり、失敗したり）」し、それを大人や友達と「わかちあい」、「ほめられ」、「熱意を燃やし」、また森林に出かけていく。

そんな循環をイメージしておくことも大切です。それは「PLAN（計画）→DO（体験・実行）→CHECK（評価）」と続く体験・生涯学習の方法を学ばせることにもなります。



**Q** 森林に潜む危険は先に除いておいた方がよいでしょうか？

**A** 大人が過剰にお臆立てをしてはいけません。

大人としての冷静さも忘れてはいけません。森林には危険があります。それは大人がきちんと管理してあげましょう。

もちろんこれも過剰に反応して最初から取り除いてはいけません。危険な場所で遊んでケガや失敗も体験なのです。逆に、少々危険な遊びで小さなケガや失敗を重ねていないと、大きな危険に気づくことができずに大きなケガをしてしまったり、小さなつまづきで立ち直れなくなってしまうかもしれません。



**Q** 昆虫やクモが嫌いなので、子どもを森林に連れて行くことが苦手です。どうしたら良いでしょうか？

**A** 好き嫌いは仕方ないことですが、先入観は与えないように気をつけて。

大人の虫嫌いは仕方ありません。しかし、その好き嫌いを子どもに押しつけてはいけません。子ども達は、初めて出会うモノに何の先入観もありません。あるとすれば興味だけです。しかし、大人は自分の価値観で、とても重要である子どもと自然との出会いを壊してしまうことがあります。虫が飛んできたら「キヤー！」クモが出てきたら「近寄ってはダメ」；子どもは次からそれらを快く思わなくなるでしょう。

自分で判断する前に、他者の価値観にすり替えられてしまうのです。何に興味を持つかは子ども自身が決めればよいこと。大人はそれを見守ってあげればよいのです。



**Q** 森林遊びをする時に知っておくべき危険はありますか？

**A** 池や崖などの地形、危険な生物。

森林遊びが良いとはいえ、自然の中には危険もいっぱいあります。ケガをした時のために救急セットは必ず携帯しましょう。

地形は、崖の高さや池があるかなどをチェックしておきましょう。迷いそうな道などは下見さえしておけばそれほど問題ありません。気をつけなければならないのはスズメバチとウルシです。スズメバチはヒゲマチよりもほど事故が多くて危険ですし、場所によってはウルシは森林中に生えています。森林遊びで最も気をつける部分です。

ウツウルシ  
3つ葉のキレな  
つる植物



ぶいん  
スズメバチ  
夏のまわり  
事故が多い。

**Q** 生えている植物などは採ってもよいものなのでしょうか？

**A** 植物も生き物です。採るときは命に感謝して最低限の採集を。

落ちている木の実や生えている植物などを拾って帰る時には注意が必要です。国立公園などは、小石一つも持って帰ってはいけません。決まりがありますし、私有地でも地主さんの許可が必要です。遊びに行く森林がどんな土地なのかをあらかじめ知ってから遊びを考えましょう。

また、山菜などはよく「おすそ分け」用に多く採ってしまいう人がいます。野菜と違う野生植物なので、採るときは自分たちが食べるだけの分量に気をつけましょう。



マツノクサ

**Q** 森林に行くときに気をつけることは、他にありますか？

**A** より楽しく遊ぶためにできるだけたくさんの方に大人を同行させましょう。

楽しく安全に遊ぶために、大人はなるべく多く参加するべきです。子どもと感動をわかちあう大人は多ければ多いほど良いでしょうし、大人の目が増えると危険への対処にもなります。

幼稚園であれば、保護者の方のボランティアを募って一緒に遊ぶことも良い考えです。また、お母さん仲間と森林に遊びに出かけるのも良いでしょう。

ただし、遊ぶ子どもにも手を出しすぎないように気をつけましょう。





そもそも、  
森林環境教育って、  
何が  
どうして  
大切なんですか？



ぎくっ。  
難しい話は  
よくわからんのじゃ。

## 森林環境教育とは

森林をフィールドとしてさまざまな体験をし、人々の生活や環境と森林の関係について理解と関心を深めることを目的とした教育活動です。様々な問題を解決するためには、理解にとどまらず、問題に気づき、それに対して何らかの働きかけができる人を育てる、言い換えれば、行動する主体的な個人を育てることが目的です。

ですから、何かを教え込むような教育ではなく、自らが体験し、ふりかえり、気づきや学びが行動につながっていくような体験教育が大切なのです。指導者にも、教えるよりは「引き出す」「促進する」「わかちあう」といった態度が求められます。

## 幼児のための 森林環境教育 9つのポイント

まずは土台づくりです。環境教育では気づきが重要です。それをもたらすものとして、(1)好奇心を健全に育てることがあげられます。好奇心は体験の原動力であり、入り口です。そして(2)豊かな感性と感覚が育っていないとせっかくの体験から情報を受け取れません。さらに、(3)身体の発育と知能の発育は重なってきます。森林に関心を向けるには(4)森林や木

のすばらしさを体で知り、好きになり大切にしようとする心を育ててくれないけません。その中で、徐々に(5)森林に関する知識や観察する力が備わってきます。そして森林との関わり方を考えるために



好奇心  
感性と感覚  
身体の発達

も(6)自分と森林が繋がっていることが実感できることも大切です。それは、私たちの暮らしは森林からの恵みをいただいで成り立っているからです。

生きていく上で出会う様々な問題を平和的に解決するためには(7)コミュニケーション能力が不可欠です。その話し合いで問題を解決していく最初の一步は相手の価値観を認めることです。(8)多様な価値観を育てることで、相手を受け入れる心を養います。一方では(9)主体性や自尊心といった心を育ててゆくことも大切です。



## あらゆる社会問題 の解決を目指して

これらは環境教育のみにいえることではなく、幼児にとつてその後の発育に必要なことです。森林環境教育は人生の土台をつくるいいかもしれません。

このような人生の土台づくりが必要な背景には、環境問題をはじめとする、様々な社会問題を平和的に解決する力が、これからの子どもたちには必要だと世界的に考えられていることがあげられます(※)。

「幼児のための森林環境教育」は、相手を大切に、自分を大切にする、ひいては人間社会も自然環境も大切に、共生する社会を創っていくという、これからの世界に本当に必要な人と社会を育てるために、大切なエッセンスなのです。

※持続可能な発展のための教育(ESD)の模式図。環境問題を含めて様々な問題を平和的に解決するための教育を目指した指針。2002年に国連で採択された。環境教育を含んだ新しい教育の流れだ。



「ESDのエッセンス」より作図



# 絵本は森への扉

絵本は子ども達の豊かな想像力を育みます。

森と子どもは、どうして絵本でつながるのでしょう？  
どうしたらつながってあげられるのでしょうか？  
つながりやすい絵本を、ここではご紹介します。

## 絵本は子どもにとって 森の架け橋。

幼児向けの絵本は、その70%近くが「森や森の動物を扱った絵本だ」と言っても過言ではありません。そのくらい森の動物に人間の心を託して幼児に親しみやすく描いているのです。

いわゆる評判の絵本は、次代を継ぐ子ども達に向けた、作者の精一杯のメッセージが凝縮されています。それは優しさ・愛情・勇氣・自立・自律・友情・マナー・生きる力など、人間が持ち備えていなければならないことばかりなのです。人として必要なことを伝える手段として、とても有効な絵本。ですから、心を豊かにする良い絵本を子ども達にたっぷり読み聞かせ続けることが大切です。大人には考えられないほど、幼児期の子どもの心は空想の中の遊びが得意です。

絵本をたくさん読んでもらっている子は森に入るなり、おおらかで開放的な世界や幻想的で神秘的のある舞台をそこに見出し、自分の読んでもらった絵本と重ね合わせる事ができます。そして森の中で、絵本の世界に素直に入り込んでいけるのです。子ども達は時にオオカミになり、時にウサギになり、時に

クマになったとしても手をつないでいたりしますが、子ども達は絵本の中の役になりきって森で遊びます。そして時には、絵本の劇遊びが始まることもあります。一本橋を渡るヤギと、それを襲う怪物トロールなどに分かれてキヤーキヤー騒いでいます。影の仕掛け人は大抵先生だったりもしますが、物語絵本は子どもの心を空想の世界に大きく膨らませる役割をしてくれます。

また、科学絵本は森へ行く前でも、行った後でも役に立ちます。「このクルミを探しに行こう！」とか、持ち帰った木の実を「この本で調べてみようね」という具合に使えます。

## 子どもの空想を 引き出してあげるために

このように、空想を膨らませ、想像力を逞しくさせるために、先生は絵本を有効に使うことができます。そのためには、ことあるごとに繰り返し繰り返し絵本を読み聞かせてあげましょう。

そして森に出かけていったときに上手に影の仕掛け人になれるように、要所で子ども達に絵本の話と森の遊びをすりあわせたり、声をかけて子ども達をその気にさせてあげます。

osusume Ehon



### ゆうがんな アイリーン

母の高熱を察して洋服を届けに行くアイリーン。途中、吹雪にあいながらも困難に負けないで勇敢に立ち向かい誠意を通す姿に感動を覚える絵本です。

作・絵：ウィリアム=スタイク  
訳：おがわ えつこ セーラー出版

osusume Ehon



### ごくに すずめのは だれ？

キツツキが老いた大木に開け、雛を育てた穴を、次の年は他の鳥が「ごてん」と呼び棲家とします。森の動物が、次々と住みかわり、大きくなった穴は、熊によって老木もろとも崩れてしまいます。素朴で温かな絵は北海道の風景そのもので、森の生態系が伝わってくる一冊です。

作：ピアンキ 絵：片山 健  
訳：内田 莉紗子 福音館書店

osusume Ehon

### こすずめのぼうけん



### こすずめの ぼうけん

初めて空を飛んだ日、こすずめは遠くまで飛びすぎてしまいました。物語の展開につれて高まる緊迫感と、結末の見事さが子ども達の心をとらえます。親の温かさが伝わる傑作絵本です。

作：ルース=エインワース 絵：堀内 誠一  
訳：石井 桃子 福音館書店

osusume Ehon



### たんぽぽ

タンポポは子どもに一番馴染みの深い花です。そのタンポポが一面に咲くのは花と種に不思議がありました。そんなことを知るとタンポポがいとおしくなります。科学とも通じる絵本です。

作・絵：甲斐 信枝 金の星社



osusume Ehon

種の移動手段を中心に描かれた絵本であり、子孫を残す種の不思議を感じる図鑑です。絵で特徴が強調されているので子どもに分かりやすく、目で見る科学の絵本です。

## たねのずかん

絵：高森 登志夫 作：古矢 一穂  
福音館書店



osusume Ehon

早春のフキノトウから、オオバコ、そして、夏のスベリヒユまで絵で子どもにも分かりやすく描いている図鑑です。草花をよく観察し、観察力と感性が育つと植物の見方が変わります。

## おいしい野草

絵：高森 登志夫 作：円山 尚敏  
福音館書店



osusume Ehon

少年が森でいろいろな動物に出会います。幼児の心の世界を白黒で鮮やかに描き空想の森の楽しさをえがいています。最後に出てくる子どもの心情を認める寛大な父親も素敵な傑作です。

## もりのなか

作・絵：マリー ホールエッツ  
訳：まさき るりこ 福音館書店

## わたしと あそんで

osusume Ehon



自然の中へ入る心構えを伝える大切な絵本の一冊。森林には、そこで既に生活している小動物がいることを知り、謙虚な気持ちになって、自然に受け入れて頂くことを、自ずとを感じる絵本です。

## わたしとあそんで

作・絵：マリー ホールエッツ  
訳：よだ じゅんいち 福音館書店



osusume Ehon

白いうさぎと黒いうさぎの優しい愛の物語が、墨絵のような濃淡のやわらかい絵で語られています。こずえの葉のそよぎ、草の匂いまで丁寧に描かれ「ずーっと一緒にいたい」という2匹のうさぎの心情が、爽やかに描かれています。

## しろいうさぎとくろいうさぎ

作・絵：ガース ウィリアムズ  
訳：まつおか きょうこ 福音館書店



osusume Ehon

山の草を食べて太ろうとするヤギと、谷でまちうけるトルル(怪物)の対決の物語。物語の構成、リズムが子どもの心に合っていて飽きさせません。また、円山公園の木道などで子どもたちの遊びが発展する材料になります。

## 三びきのやぎの がらがらどん

北欧民話 絵：マーシャ ブラウン  
訳：せた ていじ 福音館書店



osusume Ehon

冬の初め、皆に愛されていたアナグマは死んでしまいました。かけがいのない友を失った悲しみに、皆はどうしていいかわからなくなります。友達の素晴らしさ、生きるための知恵や工夫を伝え合っていくことの大切さを語る、深く心にしみる感動の絵本です。

## わすれられない おくりもの

作・絵：スーザン パーレイ  
訳：小川 仁央 評論社



osusume Ehon

冬眠中の親子熊の愛情あふれる会話の中、とうとうツララのとけるポトンポトンという春の音が聞こえてきて目覚めの時を迎えます。春風と春の花に出会う、北国の春を待つ心情が描かれている絵本です。

## ぼとんぼとんは なんのおと

作：神沢 利子 絵：平山 英三  
福音館書店



## osusume Ehon

雪のしずくや川、風の音が嬉しそうな理由を女の子が尋ね歩くと、それぞれが「いいことがあるからよ」と答えます。早春の森に小さな春

を探しに行く前に読み、研ぎ澄まされた感性で春を味わいたいものです。

### いいことって どんなこと

作：神沢 利子 絵：片山 健  
福音館書店



## osusume Ehon

クマゲラは、カラスほどの大きさのキツツキです。この本は、クマゲラの子が親鳥に促されて巣立ちしたものの、初めは木にしがみつ

### くまげらのもり

作・絵：手島 圭三郎  
リブリオ出版



## osusume Ehon

ドングリを拾ったら、ドングリコマ、やじろべえ、人形、ネックレスなど、すぐに遊びに使えますが、是非ドングリを団子にして食べることをお勧めします。手間ひまはかかりますが、昔の人の食べ物を、じっくり考える時間を持てます。

### どんぐりだんご

作・絵：小宮山 洋夫  
福音館書店

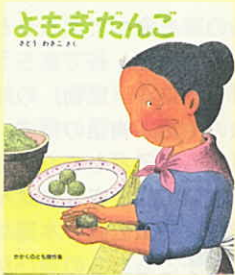


## osusume Ehon

受け継がれる命の秘密を「えぞまつ」という木を借りて描いています。世代交代している厳しい生存競争と奥深いメカニズムを優しい言葉で語りかけてくれます。長い年月を経てそこに木があることが不思議にさえ思えてきます。

### えぞまつ

作：神沢 利子 絵：吉田 勝彦  
監修：有澤 浩 福音館書店



## osusume Ehon

八百屋で売られている野菜しか知らない子どもたちは、ツクシやヨモギなどの野草がおいしく食べられることに目を輝かせるでしょう。ばばあちゃんシリーズのほのほのとした絵の楽しい科学絵本です。

### よもぎだんご

作・絵：さとう わきこ  
福音館書店



## osusume Ehon

社の大木の穴から不思議の世界へ行ってしまい、おぼけと楽しい一時を過ごします。森へ遊びに行ったときに、みんなが役

### めっきらもっきら どおんどん

文：長谷川 摂子 絵：ふりや なな  
福音館書店



## osusume Ehon

バッタの周りは怖ろしい天敵で一杯です。蛇やカマキリ。だから茂みにかくれていたのですがある日決心して飛び立つのです。迫力のある力強い

絵は自立しようとする子に勇気を促してくれるでしょう。

### とべ バッタ

作・絵：田島 征三  
偕成社



## osusume Ehon

様々な木々の冬芽がたくさんクローズアップされている写真絵本です。葉を落とした後の木の枝は、良く見れば色々な顔に見えてきます。リズムカルな文章からは息づかいさえ聞えてくるようです。そう、まるで合唱しているような。

### ふゆめ がっしょうだん

写真：富成 忠夫、茂木 透  
文：長 新太 福音館書店

題名	作・絵・訳	出版社	分類
センス・オブ・ワンダー	レイチェル・カーソン 遠山 恵子/訳	新潮社	大人
ジルベツとかぜ	マリー・ホール・エッツ たなべ いすず/訳	富山房	春
そらはさくらいろ	村上 康成	ひかりのくに	春
はるかぜのたいこ	安房 直子/作 葉 祥明/絵	金の星社	春
はるさんがきた	越智 のりこ/作 出久根 育/絵	すずき出版	春
ふうせんのおしらせ	与田 準一/作 竹山 博/絵	福音館書店	春
あめのひ	ユリー・シュルヴィッツ 矢川 澄子/訳	福音館書店	夏
あめこんこん	松谷 みよ子/作 武田 美穂/絵	講談社	夏
かえるのあまがさ	与田 準一/作 那須 良輔/絵	童心社	夏
ざっそう	甲斐 信枝	福音館書店	夏
しずくのぼうけん	マリア・テルリコフスカ/作 ポフダン・ブテンコ/絵	福音館書店	夏
とてもあつひ	こいでたん/作 こいでやすこ/絵	福音館書店	夏
はらぺこあおむし	エリック・カール もりひさし/絵	偕成社	夏
花さき山	斎藤 隆介/作 滝平 二郎/絵	岩崎書店	夏
ほうまんの池のカッパ	椋 鳩十/作 赤羽 末吉/絵	銀河社	夏
よあけ	ユリー・シュルヴィッツ 瀬田 貞二/訳	福音館書店	夏
かっぱどっくり	萩坂 昇/作 村上 豊/絵	童心社	秋
ごんぎつね	新美 南吉/作 箕田 源二郎/絵	ポプラ社	秋
たぬきのおつきみ	内田 麟太郎/作 山本 孝/絵	岩崎書店	秋
とんとんとめてくださいな	こいでたん/作 こいでやすこ/絵	福音館書店	秋
どんぐり	こうやすすむ	福音館書店	秋
ひさの星	斎藤 隆介/作 いわさき ちひろ/絵	岩崎書店	秋
ぽんぽん山の月	あまん きみこ/作 渡辺 洋二/絵	文研出版	秋
もりいちばんのおともだち	ふくざわ ゆみこ	福音館書店	秋
モチモチの木	斎藤 隆介/作 滝平 二郎/絵	岩崎書店	秋
このゆきだるま だーれ	岸田 衿子/作 山脇 百合子/絵	福音館書店	冬
子うさぎましろのお話	佐々木 たづ/作 三好 硯谷/絵	ポプラ社	冬
だんだんやまのそりすべり	あまん きみこ/作 西村 繁男/絵	福音館書店	冬
てぶくろ	エウゲーニー・M・ラチョフ うちだ りさこ/訳	福音館書店	冬
ゆきのとともだち	イアン・ホワイブロー/作 ディファニー・ピーク/絵	理論社	冬
雪わたり	宮沢 賢治/作 堀内 誠一/絵	福音館書店	冬
あの森へ	クレア・A・ニヴォラ/作 柳田 邦男/絵	評論社	その他
あかいとり	あべ 弘	童心社	その他
おじいちゃんの木	内田 麟太郎/作 村上 康成/絵	佼正出版社	その他
おじいちゃんと森へ	ダグラス・ウッド 加藤 則芳/訳	平凡社	その他
かぜはどこへいくの	シャーロット・ソルトウ/作 ハワード・ノッツ/絵	偕成社	その他
風の神とオキクルミ	萱野 茂/作 斎藤 博之/絵	小峰書房	その他
きんいろのしか	石井 桃子/再話 秋野 不矩/絵	福音館書店	その他
きつねにようぼう	長谷川 摂子/再話 片山 健/絵	福音館書店	その他
ぐりとぐら	中川 李枝子/文 山脇 百合子/絵	福音館書店	その他
鹿よ おれの兄弟よ	神沢 利子/作 G・D・パヴリーシン/絵	福音館書店	その他
たいせつなこと	マーガレット・W・ブラウン/作 R・ワイスガード/絵	フレーベル館	その他
におい山脈	椋 鳩十/作 梶山 俊夫/絵	あすなる書房	その他
葉っぱのフレディ	レオ・バスカーリア/作 みらい なな/絵	童話舎	その他
りすのパナシ	リダ・フォシェ/作 F・ロジャンコフスキー/絵	童話館出版	その他
昆虫(Ⅱ)	得田 之久	福音館書店	自然科学
葉っぱ博物館	多田 多恵子/作 亀田 龍吉/写真	山と溪谷社	自然科学
木を植えた男	ジャン・ジオノ/作 フレデリック・バック/絵	あすなる書房	大人